

第4回国際構文理論学会開催記念

Charles J. Fillmore 教授に聞く

聞き手・翻訳：長谷川葉子 / 小原京子

カリフォルニア大学パークレー校名誉教授のチャールズ・フィルモア氏は、日本では格文法とフレーム意味論の提唱者として知られている。60年代後半からの格文法の研究は、変遷を経て、80年代後半以降の構文理論の研究に発展し、また、70年代に始まったフレーム意味論も90年代以降、コーパス言語学や辞書編纂学と融合し、フレームネットとして実を結びつつある。今回のインタビューでは、9月の国際構文理論学会のための来日を前に、フィルモア教授に研究の変遷を語っていただいた。教授の言語事象に関する鋭い洞察は英語のみならず、日本語にも広く及んでいる。教授ならではの言葉の意味分析の醍醐味を味わっていたらと思う。

「フレーム」の変遷： 格フレームから意味フレームへ

長谷川 フィルモア先生の研究ではフレームという言葉が繰り返して使われますが、異なる意味で使われています。どうしてでしょうか。最初の“The Case for Case” (1968) では、格フレーム、つまり深層格の組み合わせとしてでしたけれど。

フィルモア そう、確かに、“The Case for Case”では、いろいろな動詞に現れる深層格の組み合わせを意味していました。でも、別の見方をすると、それらの組み合わせは、動詞が表す事態の間接的定義要素であるとも言えるのです。例えば、“She sent it to him”のように、動作主+受動者+着点の三格が現れれば、何らかの移動概念だし、“He smashed it”のように、動作主+受動者だったら、破壊等の使役変化、また、受動者だけであれば、“The candle melted”のような、単なる変化だと言えます。したがって、格フレームは、因果関係、変化、移動、心理的経験、発話などの状況を特徴づける手段へと役割変化してい

ったわけです。初期の研究では発話という事象には触れませんでしたけれど、当然、話者、聞き手、話題、伝達内容などの深層格も必要になります。格フレームの役割の変化に伴い、少数の格に基づいた初期の格フレームの数はどんどん増えていき、また、フレーム意味論の目標も言語で表現できる事象全てをそれぞれの意味フレームで説明できるようにするという大規模なものになったのです。

小原 その場合の「それぞれの意味フレーム」とはどういう意味ですか。

フィルモア 語彙項目は全て、特有の意味フレームを持つと考えるのですが、私たちのフレームネットプロジェクトではいくつかの語彙を同じフレームに入れます。それらの語彙の意味理解には、同じような背景知識が必要とされ、同じような推論を伴うからです。

長谷川 例えば売買フレーム。

フィルモア そう、売買フレーム。最初は売買を一つのフレームとしていたのですが、次第に売り手、買い手等の視点を含めなければなら

と考えるようになりました。それから、売り手、買い手のフレームの中にも視点の差があるんですね。「買う」というのは買い手と商品との関係だし、「支払う」は買い手と金銭との関係。つまり、違う要素が前面に押し出されることになります。格文法では、何がどのような格になるか、特に主語、目的語という表層格になるかということと、それらの依存関係が研究の中心でしたが、フレームという概念がその他の多くの要素も含めるきっかけとなったのです。

長谷川 いつ頃、格フレームから意味フレームに変化したのですか。

フィルモア そう考え始めたのはかなり早い時期でした。でも、考えがはっきりしてきたのは、Beryl (Sue) Atkins との共著論文、“Toward a Frame-Based Lexicon: The Semantics of RISK and its Neighbors”の頃だったと思います。

小原 じゃ、ずいぶん最近のことなんですか。

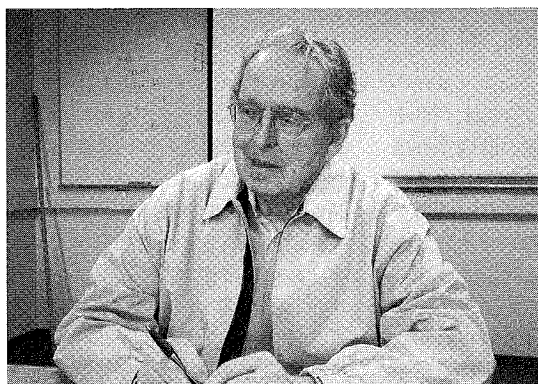
長谷川 いつですか？ 1992年？

小原 私は1971年の“Verbs of Judging”の頃ではないかと思うのですが。

フィルモア あ、そうか。そうなると、70年代ということかな。

小原 その論文で、格フレームから意味フレームへの発展に触れていらっしゃいますけれど、日本では、今でもフィルモア先生の研究は深層格の洗い出しだと思っている人たちがけっこういるんですね。

フィルモア 確かに、そういう風に考えることもできるでしょうけれど、私は、単に深層格を足している



◀ チャールズ・フィルモア教授

という見方はしていません。今の研究では、下層フレームは上層フレームから多くの情報を継承するといった、継承 (inheritance) という概念が中軸になっています。売買フレームにしても伝達フレームにしても、動作主が関与しますね。そして、動作主の特性はそれぞれのフレームによって多少異なりますが、大部分は、非常に抽象的な「行動」というフレームから継承すると考えられます。また、例えば、話し手と書き手では異なる部分もあるけれど、これらの役割に関する情報の多くは、伝達フレームから継承できます。

長谷川 さっき、先生は売買フレームに視点を加味する必要があるとおっしゃったんですけど、それはどうしてですか。

フィルモア 文を作るには、動詞を選ぶわけですが、動詞を選択することは、視点を選択することだと言えます。例えば、「売る」を選択すれば、自動的に売り手の視点を取ることになる。したがって、“He sells shoes skillfully”とか、“He sells shoes to make money”のように様態、目的、手段などの修飾を加えた場合、売り手に対する修飾と理解されます。フレームネットでは、この視点を加えたものを「語彙フレーム (lexical frame)」と呼んでいます。

長谷川 以前のバージョンの売買フレームでは、その点を記述できなかったのですか。

フィルモア 以前のフレームでは特

殊なタグを設けて明記するしかありませんでしたね。

長谷川 フレームを各々の事象に関する体系的知識だとすると、それは異言語間共通ということですか。

フィルモア 確かに、継承ということを考えて、フレームの一部には言語特有の文法が付随しないものもあります。ある事象が一つのフレームの事例だと認定された場合、私たちは無意識のうちに数々の推論を行います。例えば、売買フレームの場合、金融経済、商品価格など、言語とは関係ない数々の状況が連想されます。でも、「買う・売る」などの語彙的視点を加味した意味フレームでは、抽象的なフレーム要素から何を統語的に節の中核に置かかを選ばなければなりませんし、それらは使用する動詞によって決まります。さっきも言ったように、売買フレームは、最初の一つだと想定し、数々の表現方法はその中の単なる選択肢だと考えていたのですが、今は、言語表現には関わらないけれど、解釈するのに必要な「抽象フレーム (abstract frame)」と、今お話した、具体的に言語表現に関わる「語彙フレーム」の二種類を想定しています。けれども、金融経済自体は言語に束縛されなくても、全ての文化が金融経済でなりたっているわけではないことから分かるように、抽象フレームは、必ずしも異言語間共通というわけではありません。

長谷川 出来事の構造に関する非言語的知識と言葉が喚起する言語的

な知識と同じ「意味フレーム」という用語を使って混乱しないでしょうか。

フィルモア ここで言う意味フレームとは、認知科学で使われている統合的な意味でのフレームです。認知科学の研究における使い方は私のものとはちょっと違う場合もあります。

認知、理解、記憶と言語を結びつける概念としての「フレーム」

小原 フレームという言葉は、殆ど同じ時期に使われ始めたのですが、どちらかが借用したのですか。

フィルモア 私が使い始めたのは、人工知能の Marvin Minsky や社会学の Erving Goffman らの研究を知る前でした。ゴフマンはフレームという概念を人間行動を理解するために使いました。彼は、人間の社会行動とそれを人々がどう把握するかに興味があったのです。例えば、子供たちが床で転げまわっているのを見かけたとします。喧嘩しているのかもしれないし、遊んでいるのかもしれない。もし、喧嘩しているのなら、止めた方がいいけれど、遊んでいるのであれば、そのまましておくべきですよ。さらに複雑なのは、一人の子供は喧嘩しているつもりでも、もう一人は遊んでいるつもりかもしれない。(笑) 私たちは、人間の行動を何らかの体系に基づいて解釈、分類するわけですが、この解釈、分類体系をゴフマンはフレームと呼んだのです。行動の解釈、分類は、人によって違うし、人が何かしているのを目撃しても、それを入れるフレームが全く見つからない場合もあるでしょう。

長谷川 それがゴフマンのフレームですね。

フィルモア そう。そして、ミンスキーは、私たちの頭脳が事象をどう解釈するかの理論化に興味があったのです。ミンスキーのフレームの一つに子供の誕生パーティがあります。もし、子供たちがきれいに包んだ箱を持って玄関先にいたら、アメ

リカでの話ですが、人は普通、「ああ、誕生パーティだな」と思います。そして、そう決まったら、そこから多くの推測が生まれます。「たぶん、箱の中身はおもちゃだろう」とか、「ケーキが出るだろう」とか「ケーキにはろうそくが立っているだろう」とか。つまり、それまで経験してきた誕生パーティの記憶からどういことが起こるかを推測するわけです。そして、もし、ケーキが出てこなかったら、驚きますよね。ということは、事象がフレームと合致しないと、人は驚くということです。

長谷川 じゃ、先生のフレームはミンスキーのものと同じなのですか。
 フィルモア 言語を伴わない抽象フレームはそう言えるかもしれませんが。それから、認知心理学の「スキーマ(schema)」という概念もあります。これは、特に記憶に関する研究に使われる用語ですが、スキーマに沿ったことは記憶しやすく、そうでないものは記憶しにくいと報告されています。面白い実験があるのですが、例えば、100枚の写真をばらばらに見せた後、1枚を見せて、その写真が100枚に含まれていたかどうか聞くのです。人は普通、写真に関してはとても記憶力がいいそうですよ。次に、同じ写真を何かのまとまった話になるように並べて見せるとします。釣りをしたり、ご飯を食べたり。そして、実際には含まれてはいなかったけれど、話の筋に見合った写真を見せると、見たかどうかの判断は難しくなります。

長谷川 なるほど。それでは、先生は「フレーム」と「スキーマ」と両方使うのですか。

フィルモア 私としては「スキーマ」を使いたいのですが、「フレーム」は名詞にも動詞にも使えるのに対して、「スキーマ」の動詞形は「スキーマイズ」だし、複数形は「スキーマータ」で、ちょっと鬱陶しいので、「フレーム」を使っています。

小原 先生は「シナリオ」も使いま

すよね。

フィルモア フレームによっては、売買フレームのようにストーリーがからむものもあります。それがシナリオです。でも、「顔」のように時間の概念を含まないフレームもあるし。

小原 「リスク」もシナリオでしょうか。

フィルモア うん、「リスク」は必ずしもシナリオじゃない。

小原 では「リベンジ(報復)」はどうでしょう。

フィルモア そう、「リベンジ」はシナリオ。でも、売買フレームはシナリオ全体を含むけれど、「リベンジ」の場合は、最初の出来事は前提とされるだけで、シナリオには含まれない。

長谷川 うん、面白い。

フィルモア 「リスク」は仮定的。「もし、こうなったらよくない」といった。「リスク」自体は静的フレームだけれど、仮定的なシナリオを喚起するとも言えますね。もし、高いビルから飛び降りたら、結果は定かだけれど(笑)、屋上の縁に立っていたら、危険なだけで、結果は分かりません。こう考えると、「売買・リベンジ・リスク」のフレーム構造の違いがはっきりしますね。

小原 先生は「スクリプト」もよく使いますよね。

フィルモア 「スクリプト」は Roger Schank の用語で、一連の手順を指します。人は、ある状態になれば、こうして、こうして、こうするというのが普通の行動として期待されているといったことです。私はよく、茶の湯に招待されるのですが、あれはスクリプトじゃないですか、一つ一つの動きが。

小原 なるほど。

長谷川 ほかにもフレームに似た概念はありますけれど、認知、理解、記憶といったものと具体的な言語表現とを結び付けたのはフィルモア先生のフレームだけですかね?

フィルモア いや、ほかにも Langacker の base と profile の概念が

あると思いますよ。ラネカーはこれらを説明するために、「斜辺(hypotenuse)」という専門用語をよく使いますね。「斜辺」が何であるかを理解するには、まず「直角三角形」を理解しなければならない。

長谷川 でも、ラネカーは、あまり文法には触れませんよね。

フィルモア 彼は普通の意味での文法はあまり認めていないから。でも、ラネカーの base, profile という捉え方はとてもいいですね。また、一方、語が喚起し、話者が語を使う際に想起する背景知識としてのフレームは、人工知能で使われているフレームの概念と相通じる点があって、私はそれなりに気に入っているのですよ。

長谷川 ラネカーの base, profile の概念と先生のフレームの概念は具体的にどう違うのですか。

フィルモア そうですね、まず、「斜辺」は専門用語ですよ。そして、専門用語を理解するためにはその分野の基礎知識が必要だということは誰でも認めます。それを一歩進めて、フレーム意味論では、単に専門用語だけでなく、全ての語について、このような背景知識が必要だと考えるのです。例えば、pedestrian(歩行者)という言葉。辞書にはよく、「歩いて移動する人」とか「道を歩く人」という風に定義してあります。でも、pedestrian というのは、人が車やバスや自転車等と空間を競合するという背景がある時に使われる言葉なんですね。だから、pedestrian death は、車に轢かれた場合には使えても、公園を歩いていて突然心臓麻痺で倒れた場合には使えない。pedestrian access と言えば、車両入り口ではないという意味での歩行者入り口。

長谷川 なるほど。時々、道で怪しげなアクセサリーを売り歩いている人がいるけれど、“I bought jewelry from a pedestrian” とは言えない。

フィルモア その通り。

長谷川 そうい情報、どうやってフレーム意味論に組み込むのです

か。

フィルモア この場合は、pedestrian の背景知識という、とても特殊なフレームです。フレームネットでは、各語彙項目に必要な背景フレームと、そのフレームに照らし合わせた語彙の意味を記述しています。小原 ということは、pedestrian だけのフレームがあるということですか。

フィルモア たぶん、そうですね。ほかに同じフレームに属す言葉は思いつきませんから。似たような例に customer がありますね。辞書では「買い物する人」と定義されていますが、この定義では殆どの人に当てはまってしまいます。小さい子供を除いて、私たちは常に何かを買っているわけですから。でも、“John is rude to customers”と言った場合、ジョンは誰にでも失礼だという意味ではなく、ジョンは会社か店で働いていて、そこの顧客に対して失礼だと理解しなければならぬ。

長谷川 でも、そういう情報を形式化して記録することは可能なのでしょうか。

フィルモア どこかで明らかにしておく必要はあるでしょう。この場合は似たような言葉がいろいろある。client, customer, patient.

小原 使い分け、難しいですよ。

フィルモア ホテルは guest だし、歯医者さんでは patient、弁護士事務所では client。そういえば、こんな間違いをしたことがありますよ。検眼医なのですが、「どうしてドクター・ビックスを知っているのですか」と聞かれて、“I'm his patient”と答えたら、オハイオではそうは言わないのだそうです。検眼医は体を治療するわけではないから。それで、“I'm his customer”と言い直したら、それも駄目で、正しくは、client なのだそうです。日本語の「お客様」は、ホテルの guest にも飛行機の passenger にも使えますよね。これらの語彙には相似点があるけれど、言語によって語彙化が異なるということですね。

言葉に興味を持ち始めた きっかけ

小原 話は変わりますが、先生は、語彙意味論だけではなくて、辞書編纂学にも興味がおありですね。興味を持たれたきっかけは何ですか。

フィルモア そうですね。イタリアのピサで Institute for Computational Linguistics の主催で夏季講座が開かれ、招待されたんですが、そこでスー・アトキンズの辞書編纂学の講座に参加したのがきっかけかな。80年代だったと思います。でも、言葉そのものに興味を持った最初のきっかけがいつかと言うと……。えーと、両親が亡くなって家を整理していた時、私が小学校1, 2年の頃に書いた紙切れが何枚か見つかったんですが、そこに書いてあったのが come と go なんです。(笑)

長谷川 何ですか、それは。

フィルモア ただの紙切れですよ。それに、come と go とだけ書いてあったのです。どういうつもりだったのかは、全く覚えていませんけれどね。

長谷川 一生、come と go と付き合い宿命だったのですね。

フィルモア は、そうですね、宿命だったのですよ、きっと。それから、14か15歳の頃かな、カトリックの女の子が好きになって、私がお子に「カトリック信者はいろんな偶像に祈るから、多神教 (polytheistic) なんだね」と言ったところ、その子は、「私たちは聖人をあがめ (revere)、聖母マリアを敬慕 (adore) するけど、崇拜 (worship) するのは神様だけ」と答えたのです。何だかよく分からないけれど、同じようにひざまずいて祈っていても、いろいろあるんだなあと思いましたね。言葉の意味の微妙な違いについて聞いたのはそれが初めてだった気がします。

長谷川 先生は語彙の意味そのものより、実際の文の中で語が持つ意味についてずっと研究していらっやるわけですね。

フィルモア 私は、語彙を分析するには、文中のまわりの語との関係を見る必要があると考えています。

長谷川 重要なご指摘ですね。

フィルモア 私がミシガン大学で教わった語彙意味論というのは、いわゆる意味素性に基づく語彙意味論 (checklist theory of semantics) だったのです。つまり、意味素性のリストがあって、それらに照らし合わせて語を分析していくというものでした。もちろん、いくらそんなことをしても語の意味は理解できませんけどね。場の理論 (Field Theory) を学んでいたのですけれど、これは意味場ごとに語を分別して、各々の意味場内で、一つの語の語義が他の語の語義とどう異なるかを分析していくのです。そして、語義の違いを記述するには、必要最小限の素性を用いることが望ましいとされていたのですが、こういう語義の分析方法には問題があると思いましたね。例えば、borrow の語義を「誰かから何かを受け取るが、所有しないこと」と分析した言語学者がいました。でも、私は、borrow には、貸し手に返すことが期待されているので、この記述では不十分だと思いました。しかし、場の理論では、borrow が含まれる意味場内に「貸し手に返す前提で」という一点で borrow と区別される他の語がない場合、わざわざ borrow の語義には含めないのです。「貸し手に返す」というのは言語学的事実ではなく、単なる礼儀上のことと考え、語義記述には含めないと言うのです。でも、私は、たとえ、区別される語がほかになくても、borrow の語義には「後で返す」ということも含めなければならないと思うのですよ。つまり、他の語の語義と区別するための素性のみを見るのではなく、借り手が実際におかれる状況を考えて語義を記述すべきだと思うのです。

語彙と文法

小原 いろいろな種類の情報がありますが、それをどこに、どういう風

に記述するかも問題ですよ。

フィルムオ そうですね。これは、9月の国際構文理論学会の発表で取り上げようと考えているのですが、語彙と文法との関係、特に構文の目録との関係を考えなければなりません。フレームネットでは構文の目録というか、一覧表があることを想定して語義記述を行っています。例えば、それぞれの語について、語義はこれこれだとした後、この語はこれらの構文で使用されるという風に記述するための構文の一覧表です。しかし、標準的な構文目録は存在しませんから、語彙情報資源を構築すると同時に構文目録も作成する必要がありますのです。

長谷川 ということは、フレームネットプロジェクトの成果としての語彙データベースと、構文理論によって書かれた文法、つまり構文目録は相補的な関係にあるということですか。具体的にはどのように？

フィルムオ それでは、例として、else を見てみましょうか。else の語義は、other と似ていますが、else は other とは異なり、文中の特定の位置にしか現れません。例えば、what else, something else, somebody else, somewhere else のように、疑問詞か some を含む名詞に後続します。でも、else は another と同様に、既に言及され、比較対象となるものがあることを前提としています。例えば、“I have another idea” や “I thought of something else” といったぐあいに。けれども、something other や what other とは言えません。つまり、other と else は語義的には同じフレームに属すと見なしていいと思いますが、文法的には違うということです。辞書で else を引いた時、こういことが分かるというですよ。主要部(head)に先行するのではなく後続し、しかも共起する語に限られるということも、辞書を引いたらすぐ分かるようにしたいものです。しかも、other に関しては、else と異なり、疑問詞や some を含む代名詞と

共起しないということも辞書で調べられれば素晴らしいのではないですか。else の語義欄に、その例文と、属する意味フレーム名、今、述べたような特定の構文に参加するというを全部記述し、これらの統語論的意義は文法欄に載せるようにしたいのです。else や another など各々の語彙項目の語義情報に対応する構文目録とは、そういうものを考えています。

小原 ということは、意味フレームと構文の関係は1対1ではないということですね？ else と other は同じフレームに属すけれど、違う構文に現れる。

フィルムオ その通り。意味フレームと構文が1対1対応すると考える言語学者もいますが、そうではないと思います。二つの語がほぼ同じ意味を持つからと言って、必ずしも統語的に同様とは言えません。

日本語との出会い

長谷川 次に、先生の日本語との出会いについて伺いたいのですが。

小原 私も。日本語の知識が影響を及ぼした研究について教えてください。もちろん、格文法はその一例ですけれど。

フィルムオ 格文法の構想のヒントとなったのは日本語の助詞です。日本語の名詞句には後置詞、つまり助詞が付き、英語には前置詞が付きますよね。さらに、日本語は主語と目的語にも助詞が付くけれど、英語の主語と目的語には前置詞が付かないことについて考えたのです。英語の前置詞は日本語の助詞に対応し、深層構造では、英語の主語と目的語にも前置詞が付くと考えました。主語に付くのが by で、目的語に付くのが of です。そして、これらの前置詞は文を名詞化したり動名詞化した時にのみ現れると考えました。例えば、buying of the fish by the chef のように。そして、動詞が定動詞形の場合には、これらの前置詞は削除されるとしたのです。私自身は、日本語と英語を共通に取り扱えるの

で、このモデルがとても気に入っていました。確かに、全ての格に前置詞が付くという最初のアイデアは、日本語の助詞を見ていて思いついたものです。

長谷川 その後はどうですか。ほかにも日本語を研究することで見えてきたことがありましたか。

フィルムオ いやいや、日本語は私にとってずっと謎ですよ。(笑)

小原 例えば、日本語の擬声語・擬態語は？

フィルムオ 日本語を学び始めた初期の頃から、私は擬声語・擬態語にたいへん興味があって、日本に住んでいた頃はよく集めたものですよ。今では何冊も擬声語擬態語辞典が出版されていますけれどね。でも、どうがんばってもマスターはできませんでした。たぶん、日本人にとって waddle, stagger, swagger といった様態動詞を学ぶのが難しいのと同じなのではないですか。

小原 本当にああいう区別は全くないかげんと言うか...

フィルムオ 私は朝鮮戦争後に兵役で日本に行き、日本国内で除隊した最初の兵士だったので。ソ連のラジオを傍受する任務についていたのですが、京都で、今でも大好きな伏見稻荷神社の近くに住んでいました。確か、1955年に除隊したのかな。その後、日本人の家に間借りしていたのですが、一度、病気になって、医者に行ったのですよ。そうしたら、その先生が「どんな痛みですか。ひりひり？ ぴりぴり？」なんて聞くんです。これじゃ、返事のしようがない。(笑)

小原 日本に行く前から日本語をご存じだったのですか。

フィルムオ いえ、日本へ行ってからです。日本語を勉強したのは。毎日仕事が終わると、基地を出て、電車に乗って、お寺や神社、喫茶店、バーを巡って、多くの大学生たちと知り合いになりました。いつも手帳を持ち歩いて、新しい言葉を書き留めていましたね。外国に住んでいると、新しい語を覚える度に何度

も繰り返し聞くことができている。その前に、ミネソタ大学で学部生として言語学を専攻したので、いつも日本語の木構造を書いていたよ。日本語の文を後ろから英訳するとほぼ完璧な英文になる文を見つけてとても感激したこともありました。今、思い出せなくて残念ですが。例えば、「...といます」が“I think that ...”となるとか。日本語を右から左に書くのはそのためだと言ったら、本気で信じてしまった人がいて、困りましたけれど。(笑)

長谷川 日本語はアラビア語とは違うのですけれどね。それでは、構文理論の枠組みは日本語を分析するのに適していますか。

フィルモア そう思いますけれど。例として、英語の the more ..., the merrier ... に相当する日本語の構文を考えてみましょうか。日本語には、「すればするほど」とか、「あることはあるが」など同じ形態素を2箇所て繰り返す構文がいくつもあります。言語が文脈自由文法でないことを示してくれる好例です。「あることはあるが」は「確かにあるが、もしかすると聞き手が誤った推論をしているかもしれない」というような意味を持つ構文ですね。

長谷川 構文理論ではそれらをどのように分析するのですか。

フィルモア 構文理論のアプローチの基本は、ある特定のパタンが特別な意味を持ちうるということに着目する点です。ですから、これらのパタンのほかにも日本語には、少なく

ここで言及されている第4回国際構文理論学会は、本誌6月号「片々録」でもお伝えしたように、9月1日(金)~3日(日)、東京大学駒場キャンパス18号館/数理研究科で開催されます。詳細は、<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~iccg2006/iccg2006.html> をごらん下さい。

とも確か5,6パタンあったと思いますが、ある形態素の他の箇所での繰り返しを構文の概念として捉えることができるわけです。

小原 「行くに行けない」などもそうですね。

フィルモア そう、そう。それから、サ変動詞も面白い。「勉強するにはしたが」「勉強すればするほど」といった。日本語の使役構文にも構文理論で分析すると面白いものがあることもありますよ。

フレームネットプロジェクト

長谷川 最後に、フレームネットプロジェクトの現在の活動について伺いましょうか。

フィルモア いろいろありますが、専門用語に関するフレームのプロジェクトが面白いかもしれませんね。ドイツから来ている Thomas Schmidt がサッカー・フレームネットを構築しました。英語、ドイツ語、フランス語でのサッカーの記述を綿密に分析して、サッカーに関するいくつかの抽象フレームを定義し、語彙フレームを作り、サッカー試合に関する多量の文に注釈を加えたものです。それから、Andrew Dolbey がパイオ・フレームネットを構築しようとしています。

小原 分野特定フレームネットとし

ては最初のプロジェクトですね。

フィルモア ええ。フレームネットプロジェクト自身は、一般語彙の分析をしているのですが、ここで開発された分析方法やデータ構造が専門用語の語彙分析にどのくらい有効か、ずっと知りたいと思っていたので、この2つのプロジェクトにはとても興味があります。それから、最近では語彙フレームだけではなく、文法の面にも力を入れています。特殊構文とそとの語彙の役割。この記述がとても難しい。9月の学会でもお話ししますが、そのほかには、パラレルテキストのフレーム意味論的分析も面白いと思いますよ。コナン・ドイルの『バスカヴィル家の犬』の英語原本と、ドイツ語、スペイン語、日本語の翻訳を、主に移動事象を中心に比較して、フレーム注釈を施しているんですが、どのくらいフレームが保持されるかというのは興味深い話題ですね。

長谷川・小原 どうもありがとうございます。9月のご講演、楽しみにしています。

[カリフォルニア州パークレー International Computer Science Institute (ICSI)にて。2006年6月1日]

(長谷川: カリフォルニア大学パークレー校準教授、小原: 慶應義塾大学助教授)

セントアイヴズの画家たち(6)

—表紙について—

20世紀初頭の元祖抽象はいわば「引き算」の美学である。だから「え? これだけ?」と拍子抜けを誘う。対してその後の抽象表現派は「足し算」。「こんなに?」と、後退りを強いる。表現派は過剰で、押しつけがましい、自意識も強い、というのが相場だ。

今月号の表紙「失われた炭坑」(1959年 油彩 キャンパス 182.8×152.4cm)はピーター・ラニオン(1918-64)から。セントアイヴズの画家の中でも珍し

い生粋のコンウォール人だ。実はこの人、1959年にグライダーを始めている。もともと空からの風景を題材にしていたが、「実際にあそこに行こう」と思ったらしい。実体験をへて、画風も変わった。強烈な筆使いは明らかに抽象表現派の洗礼痕。ただ自意識や情念よりは、外にむけて開かれた目を感じさせる。間があるのだ。一次元、二次元といったものでなく、幾重にも世界が折り重なる、その間隙を突く見通しの良さ引きこまれる。スピードがあって、距離があって。

生没年からも察せられるように、グライダーの事故が元で天逝した画家である。 —阿部 公彦